様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月　13 日現在

機関番号：３４６０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０５５６
研究課題名（和文）外国人日本語学習者の代用表現の習得と日本語教育への応用
研究課題名（英文）The acquisition of anaphors, pronouns, zero pronouns by L2 learners of Japanese and its application to Japanese education

研究代表者
吉田　智佳（YOSHIDA CHIKA）
天理大学・国際学部・講師
研究者番号：00388886

研究成果の概要（和文）：
本研究では調査対象を研究当初の「代用表現」だけでなく、「助詞」の使用にまで広げた。それは代用表現の誤りよりも助詞の誤りが顕著だったからである。その結果、初級レベルの学習者は助詞を脱落したり、誤って使用したり、（特に「は」を）過剰に使用した。一方、超級レベルになっても「は」の使用は日本語母語話者と同様レベルにはならないことが分かった。さらに、この誤用の中には母語による影響を受けていると思われるものだけでなく、学習者の母語に関係なく、共通した誤りもあった。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study was to examine how the L2 learners of Japanese use anaphors, pronouns, and zero pronouns. We expanded our subject of investigation to the acquisition of Japanese particles of L2 learners, because we noticed that there were much more performance errors in their particle use than the ones in their pronominal use. As a result, we found that most of the beginners dropped or overused *wa* and that even highly advanced L2 learners of Japanese were unable to correctly use *wa*. These errors included some universal and L1 influence errors.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,600,000	480,000	2,080,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：第二言語習得理論

１．研究開始当初の背景
初級レベルの日本語学習者が「私は～」、「彼は～」と、日本語の母語話者ならばそのようには言わない文脈で、人称代名詞を過剰

使用している場面に出くわすことがある。日本語学習者が円滑なコミュニケーションを行うために、彼らは談話内で代用表現がどのように使用されるのか習得する必要がある。ところが、実際の教育現場で、教師は代用表現の特性を断片的に指導することはあっても、初級段階から体系立ててその用法を教示することは少ないようである。その主要な原因は、教える教師の側の問題というよりも、教授法の基盤となるべき習得の基礎研究が未だ十分におこなわれていないためであると考えられる。すなわち、代用表現に関して、日本語学習者の習得困難点が明白にされていないため、どのように教えていったらよいのか分からないのである。したがって、日本語学習者の代用表現の習得過程を明らかにしていくことは、日本語教育において大いに役立つと考えた。

本研究で、その研究対象とする「代用表現」は以下の 3 項目とした。

(i) 人称代名詞（「わたし」「あなた」「彼」など）と指示代名詞（「あの人」「その人」）
(ii) 視点名詞（三原・平岩, 2006）である「自 分」
(iii) 音形を持たない代名詞である「ゼロ代　名詞」（φ と表記する）

日本語は人称代名詞を頻繁に使用しない言語であり、その代わりに、「自分」という視点名詞を使用したり、文脈が許せば音形のないゼロ代名詞を使用したりする。このような日本語の特性が習得できなければ、違和感のある日本語をいつまでも産出し続けることになる。

ここで、上記(i)-(iii)の代用表現の特性を概観する。「各々の人に母親がいて、その各々が自らの母親を愛している」ことを表現する場合、人称代名詞を使用した(1a)はその解釈を持たず、視点名詞(=(1b))とゼロ代名詞(=(1c))を使用した場合のみがその解釈を持つ。

(1) a. *誰もが彼の母親を愛している。
（人称代名詞）
b. 誰もが自分の母親を愛している。
（視点名詞）
c. 誰もが φ 母親を愛している。
（ゼロ代名詞）

(2)の会話で、(2A)に対する受け答えとして、(B1)と(B2)はきわめて不自然であり、「その人」で答えるか(=(B3))、または「イチロー」という固有名詞を繰り返さなければならない(=(B4))。

(2)
A: 昨日、イチローと話したよ。
B1: *彼は誰ですか？（人称代名詞）
B2: *あの人は誰ですか（指示代名詞
B3: その人は誰ですか？（または、「誰ですか、その人は？」）（指示代名詞）
B4: イチローって誰ですか？（固有名詞）

すなわち、日本語の三人称代名詞である「彼」や「彼女」は、話し手にとって既知情報である時のみに使用可能なのである。「彼」「彼女」は、話者が具体的な指示対象人物を心の中に思い描いていない限りは、照応的な用法としては使用できない。

また、二人が向かい合っている場面での会話(=(3))では、場面や状況を語用論的に考えると他にもいいろいろな判断ができるかもしれないが、一般的には(A1)よりもゼロ代名詞を使用した(A2)の方がより自然である。そして、その受け答えでは(B1)は不自然であり、(B2)が自然である。

(3)
A1: ?あなたは夕ご飯をたべましたか？
（人称代名詞）
A2: φ 夕ご飯を食べましたか?
（ゼロ代名詞）
B1:*はい、それはおいしかったです。
（人称代名詞）
B2: はい、φ おいしかったです。
（ゼロ代名詞）

以上の考察からも分かるように、日本語の代用表現の用法は複雑である。しかし、日本語学習者が違和感のない自然な日本語を操るようになるためには、このような代用表現の用法を習得していかなければならない。その際、学習者はどのような道筋を辿って習得していくのであろうか。そして、どのような用法でつまずきやすいのであろうか。これらを実証的に調査することは日本語教育に大いに貢献できる、意義ある研究だと思われる。

上記の背景のもと、当研究を開始した。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本語学習者を対象に、日本語の「代用表現」の使用、及びその習得の実態を詳細に調査し、そこから導かれる結論を実際の日本語教育現場へ活かすための提案をすることである。

３．研究の方法

本研究次のような手順で進めた。

（１）日本語学習者の母語における対象項目（ここでは特に「代用表現」）についての知識を得ること

（２）日本語の文法、理論的知識を固めること

（３）先行研究からの知見を得ること

（４）日本語学習者のデータ収集

（５）データ分析と考察

（１）～（３）については、関連のある書籍、文献を読み進めた。先行研究に関しては、どのような被験者を対象に、どのようなアプローチで研究がなされ、その結果が得られたかを整理していった。

（４）インタビューによるデータ収集と、文法性判断テストを実施した。本実験を実施する前に、まず、予備実験をおこなった。初級、中級、上級学習者を対象にインタビューを行い、その後、インタビューでの質問などを検討し、本実験に臨んだ。また、文法性判断テストに関しては、まずは試作問題を日本語母語話者 10 名に実施し、その結果を見て問題を改訂した。

（５）予備実験で収集されたデータを、情報処理的、統語的、語用論的観点から分析し、各言語の母語話者における日本語の代用表現の習得の特徴が何であるのかの基礎資料とした。

その後、問題点などを検討し、改訂版を作成して本実験に臨んだ。

４．研究成果

研究開始年度は申請当初のテーマを研究計画に従って調査を進め、代用表現の使用実態を調べた。ところが、調査の途中で、初級レベルであっても、ほとんど代用表現の誤りは見られなかった。当初は、実験方法に問題があったのかもしれないと方法の検討を繰り返したが、その過程で興味深い事実に気付いた。それは日本語の助詞との関連性である。つまり、初級段階では助詞の脱落が多いのに比べ、中級、上級、超級レベルになると助詞の脱落は大幅に減少する。また、助詞の使用についても、レベルが上がるにつれて誤用が減少する。上級レベルになると「は」を除いては95％以上の正用率であった。その一方で、超級レベルになっても助詞「は」の使用は日本語母語話者と同様レベルにはならない。

代用表現は係助詞「は」と共起することが多い。なぜなら、「は」は主題に付随するからである。この点に着目し、まずは助詞の使用を調べることにした。超級レベルになっても助詞「は」の誤用が見られるのは特定言語の母語話者に限定されるのかどうかを調べるために、中国語母語話者、英語母語話者、韓国語母語話者を対象に調査を行った。いずれの言語の母語話者の場合にも日本語母語話者の助詞の使用と異なる部分があったのである。しかも、対象としたこれらの学習者はいわゆる臨界期を過ぎてから日本語学習を開始している。そこで、少し方向を転換することになったが、「臨界期を過ぎた外国語学習者の代用表現（および、その周辺）の文法事項（助詞）の習得」について調査を行った。その結果、学習者の母語とは関係なく、誤りの見られる部分と、母語に影響を受けている部分の双方が観察された。しかし、この結果はまだ対験者数が少ないため、一般化はできない。しかし、助詞の使用を含めた代用表現の使用実態を探る研究は日本語学習者の学習レベルを測る指標となりうるという新たな視点を提供してくれた。現在、成果を論文にまとめている最中である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計３件）

(1) Chika Yoshida (2012)（発表予定）Poster presentation: A universal semantic constraint on the acquisition of the Japanese topic marker by

advanced L2 learners. the European Second Language Association (EUROSLA). September 6-8, 2012. Poznan, Poland.

(2) Chika Yoshida and Tomohiko Shirahata (2011) Papar presentation:
Performance of an L2 learner after the critical period: focusing on the acquisition of Japanese particles. the European Second Language Association (EUROSLA). September 9, 2011. Stockholm, Sweden.

(3) Chika Yoshida and Tomohiko Shirahata (2010) Poster presentation:
Performance of L2 learners after the Critical period: the case of Chinese learners of Japanese; the European Second Language Association (EUROSLA), September, 8, 2010. Reggio Emilia, Italy.

６．研究組織

(1)研究代表者

吉田　智佳（YOSHIDA CHIKA）
天理大学・国際学部・言語教育研究センター・講師
研究者番号：00388886

(2)研究分担者

白畑　知彦（SHIRAHATA TOMOHIKO）
静岡大学・教育学部・教授
研究者番号：50206299